

国語科における伝統的な言語文化の理解と表現 ―俳句の鑑賞と創作を中心に―

Understanding and expression of traditional language culture in the school education Japanese language course
—focusing on the relationship between appreciation and creation of HAIKU—

馬場 治 (人間科学部こども学科教授)

Hajimu BABA (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

我が国の伝統的な言語文化とは我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的価値をもつ言語そのものである。江戸時代には広く庶民にも俳諧文芸が流行し、紀行文「奥の細道」で有名な松尾芭蕉の活躍もあり、多様な言語文化の中で国民的な言語文芸として最も普及した韻文は、俳句である。俳句とは、五・七・五の三句十七音の韻律から成る日本語独自の定型詩である。世界最短の限られた音節数を反映した極端に少ない文字数の中で最大限の表現を果たすために、語彙力と言語感覚の養成が期待される。俳句を創作する際、児童・生徒・学生らにとっては、切れ字「や」「かな」「けり」などの表現技法よりも、「季語」と呼ばれる、新年と春夏秋冬で特定の季節を表す言葉を含まなければならないというきまりの方がハードルは高いようである。そこで、教科書掲載の古典的な名句を踏まえつつ、五・七・五の三句十七音の定型だけは原則として守り、「季語」は「地名」や「事物」で代替してもよいこととして創作を促す言語活動を試み、ICTやSNSが日常生活に浸透してきた時代における伝統と革新を交えた俳句の多様性を考察する。

〈キーワード〉

定型 季語 切れ字 リズム 言語活動

はじめに

平成20年版の学習指導要領(文部科学省)で「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。小学校では中学年の第3学年及び第4学年の指導事項に「(ア)易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」とあり、韻文では五・七・五(上の句) + 七・七(下の句)の三十一音を定型とする短歌と、上五・中七・下五の十七音を定型とする俳句を教材とするが、短い分、俳句の方が親しみ易く取り組み易いようであ

る。解説には、「『易しい』とは、意味内容が容易に理解できるということである。『文語調』とは、日常の話し言葉とは異なった特色をもつ言語体系で書かれた文章の調子のことである。『文語調の短歌や俳句』では、歴史的仮名遣いや古典の語句などが用いられている。教材としては、親しみやすい作者の句を選んだり、代表的な歌集などから内容の理解しやすい歌を選んだりすることになる。各地域に縁(ゆかり)のある歌人や俳人、地域の景色を詠んだ歌や句を教材にすることも考えられる。また、短歌や俳句を自分でもつくってみたいという気持ちをもつように指導することも大切である。実際につくってみることで、よさを実感し、音読することの意義を深く

理解することになる。」と記述されており、鑑賞と創作は車の両輪と言えよう。

取り組み易くなったのは、明治時代を代表する俳人正岡子規の俳句の革新による。子規は俳諧から発句を独立させ俳句という呼称を与えた。更に俳聖松尾芭蕉を神格化した江戸時代以来の知識や教養を銜った陳腐な俳句を「月並俳句」と呼んで否定し、絵画の描写法に影響を受けた「写生」概念を導入した現実密着型の俳句を確立させた。このように、俳諧の旧弊から解放し、文明開化した近代日本に相応しい自由で多様性のある俳句として蘇らせた子規の功績が現代の国語教育にも及んでいる。そこで、小稿では具体的な俳句作品に即して、鑑賞と創作の関係から、国語教育の言語活動を概観し、「取り組み易い」という俳句の利点を創作の場で如何に整え、語彙力と言語感覚を養う深い学びへと活かすべきかについて考察してみたい。

一 小学校国語科における俳句の言語活動

まず、平成20年版学習指導要領に準拠した平成23年発行の教科書（光村図書）に選ばれ収録されたものは、江戸三大俳人とホトトギス派の三俳人の代表作で、次のとおりである（季語は**囲み**、切れ字は**網掛け**、季節は**〱**で示す）。

三上 わかば

古池や**蛙**飛びこむ水の音**〱**春**〱**閑かさや岩にしみ入る**蟬**の声**〱**夏**〱**松尾芭蕉

菜の花や月は東に日は西に**〱**春**〱**春の海終日のたりのたりかな**〱**春**〱**与謝蕪村**〱**やれ打つな**〱**蟬が手をすり足をする**〱**夏**〱**雪とけて村いっばいの子どもかな**〱**春**〱**小林一茶 * 一茶の句で用いられた「やれ」は気づきや呼びかけの感動詞、「な」は禁止の終助詞。

三下 あおぞら

荒海や佐渡によこたふ**〱**天の河**〱**秋**〱**松尾芭蕉**〱**さみだれや大河を前に家二軒**〱**夏**〱**与謝蕪村**〱**痩せ**〱**蛙まけるな一茶これにあり**〱**春**〱**小林一茶

四上 かがやき

雀の子そこのけそこのけ御馬が通る**〱**春**〱**小林一茶**〱**夏河を越すうれしさよ手に草履**〱**夏**〱**与謝蕪村**〱**名月や池をめぐりて夜もすがら**〱**秋**〱**松尾芭蕉

四下 はばたき

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺**〱**秋**〱**正岡子規**〱**桐一葉日当たりながら落ちにけり**〱**秋**〱**高浜虚子**〱**咳の子のなぞなぞあそびきりもなや**〱**冬**〱**中村汀女

単元目標は「声に出して楽しもう **言葉**」で共通しているが、指導目標は三年

が「◎知っている言葉を手がかりに情景を想像したり、日本語特有のリズムを感じたりしながら短歌や俳句を音読し、文語の調子に親しむことができる。」、四年が「◎文語調の情景を想像しながら短歌や俳句を音読して、日本語特有のリズムを感じ取ることができる。」と相違している。意味内容を理解する以前に身体知として言葉の息遣いを体得させる方略である。文字だけでなく音声重視する指導言は、「声に出してなんども読み、言葉の調子やひびきを楽しみましょう。気に入ったものは、おぼえて言ってみましょう。▼知っている言葉を手がかりに、言葉のまとまりを考えましょう。▼どこで切って読むと、調子よく読めるでしょう。▼声に出しながら、一音ずつ手をたたいてみましょう。いくつたたきましたか。」等と記されている。読む声に手拍子を伴って五・七・五のリズムを身体に刻むことができる。

言語学的には、音節は母音を主とした音を区切る単位のシラブル、拍は一拍が同じ時間的長さを持つリズム上の単位のモーラで相違するが、児童には暗唱によって五七調の語感やリズムを体得させ、季語や切れ字に印を付け、季節を確認することと俳句のきまりを理解し、創作という表現活動へ向かう基礎を身に付けさせたい。

リズム優先の韻文と情景説明優先の散文の違いを理解させるためには、敢えて「古池の水は、ひっそりと静まり返っている。一瞬、辺りの静けさを破って蛙が飛び込む水音が聞こえた。」等の口語訳を例示し対比することが有効であろうと考える。

季語は児童にも身近なものばかり。特にホトトギス派の俳句は、写生や花鳥諷詠を重視した作風だが、伝統的な俳句の形式を重んじ、四季折々の自然や生活を客観的にありのまま表現しているので、句が詠まれた情景を想像することは容易である。

平成21年6月、右の概要を踏まえ私が実際に小松市立月津小学校六年国語の45分2セット授業で地元縁の俳句の鑑賞と創作を指導した言語活動例を紹介しておく。

①「小松を訪れた芭蕉さん」（鑑賞）		②「俳句カルタと俳句の創作」（創作）	
導入「おくのほそ道」について	10分	導入 俳句について	10分
北陸路の芭蕉吟	20分	俳句カルタで遊ぼう	20分
小松での道行き	15分	俳句を作ろう	15分

小松は「奥の細道」の帰路で、芭蕉は多太神社と那谷寺を訪れている。まず年表と地図で「いつ、どこで」を確認し、スライド画像で登場人物や名所を提示した。

芭蕉が主に歌枕と古戦場を訪ね、先人の和歌や史実を追体験する目的で旅した点、感動の気持ちを表す言葉が五・七・五の三句十七音の定型で吟詠した点を説明した。その上で、当該段の原文を文語調も意識して音読し、段末の俳句を紹介し鑑賞した。「むざんやな甲の下のきりぎりす」(秋)(謡曲「実盛」の一節「あなむざんやな」)を応用。季語は今のコオロギ。木曾義仲との篠原合戦に敗れ壮烈な最期を遂げた平家の老將齋藤別当實盛の兜を見て『平家物語』の場面を想起した哀悼の句。

「石山の石より白し秋の風」(秋)「石山」は那谷寺境内の灰白色の岩山を指すなら普通名詞、聖武天皇の勅願で良弁僧正が創建した平安王朝文学の舞台として有名な滋賀県大津市の石山寺なら固有名詞だが、眼前の石山の白さを賞賛しつつ、石山寺をも想起させ、更に古代中国の五行思想に基づき四季に色を配当(春≪青、夏≪赤、土用≪黄、秋≪白、冬≪黒)する掛詞的な修辭法を用いた聖地への挨拶の句。

右の句の趣意に触発されて男子児童が創作した秀句を一句ずつ紹介しておこう。俳句の基本が「ものをよく見て感じ、素直な言葉で表現する」ことだと納得できる。ただ、五・七・五の「定型」は意識しても季節を表す「季語」は偶々だったようだ。

「かぶとむし」昔は武士か天皇か(夏)(實盛遺品の甲から昆虫の王者である兜虫を連想し、オスの立派な頭角や甲殻から前世は實盛のような立派な武士が生まれ変わったのではないかと、仏教思想の輪廻転生を彷彿とさせる見立て表現が秀逸)。

「雷鳥や雪にとけたかあれどこだ」(夏)(高山に棲む氷河期から生き残るキジ科の貴重種で天然記念物。夏は山肌に似せた白と茶の羽色、冬は羽が雪山と同じ白色の保護色に変化する特徴を「かくれた」でなく「とけた」と表現したのが秀逸)。

二 中学校国語科における俳句教材と中学生の俳句作品

中学三年の国語教科書(光村図書)には、「言葉とともに」の単元で「どの子にも涼しく風の吹く日かな 飯田龍太」の俳句について鑑賞した、現代俳句協会特別顧問で文化功労者の宇多喜代子「俳句の可能性」という次の文章が収録されている。

俳句が散文や報道記事などと違うのは、省略されている部分を、読む人の自由な解釈を補って鑑賞できるということである。この句を読んで、「どの子にも」とは自分のことだ、と思う人もあるだろうし、校庭の木陰でクラスメイトとくつろいでいるときのことだと思う人もあるだろう。幼児の頃、海辺で遊んだ体験を

思い出す人もあるだろう。

そんな想像をかきたてる個々別々の言葉を一つにつないでいるのが、五・七・五という「定型」と、「涼し」という夏を表す言葉、すなわち「季語」である。詳しい説明を省略する俳句には、一句の柱となる言葉に、「季語」を用い、それを五・七・五という「定型」で表現するという基本的な約束がある。この約束を「有季定型」といい、俳句という韻文を支える大きな力となっている。「涼し」が夏の季語であることを知るには「歳時記」を繰ればよい。

俳句の骨法を生徒に分かり易く伝える名文ではあるが、鑑賞はともかく、創作となると、特定の季節を表す言葉である「季語」のハードルが高い。なぜなら、明治五年以前に使用されていた月の満ち欠けを元にした旧暦(太陰暦)によっており、現代生活の季節感とはズレがあるからである。また、「歳時記」から「季語」を選択することは伝統的な言語文化に触れ、語彙力を培う機会となるが、当時当所の感動にそぐわない「季語」を無理に用いることは却って素直な表現を損なう虞もあるのではないかと考える。不易(不変)と流行(変化)のバランスが大切であろう。

「俳句の可能性」では例外として、「分け入っても分け入っても青い山 種田山頭火」の俳句についても取り上げ、鑑賞した次の文章を記している。

放浪の俳人と呼ばれた山頭火は、一人で全国を行脚する旅に出た。繰り返した言葉のリズムが、山道をひたすら進む歩調に重なり、読者を共に歩いているかのような調子に誘い込む。

この句は五・七・五の定型をはみ出しており、季語もない。このような自由な音律の俳句を「自由律俳句」とよび、季語のない俳句を「無季俳句」とよんでいる。

但し、自由律まで許容すると韻文の範疇を逸脱し、リズムが乱れる虞もあるので、創作では「有季定型」だけでなく「無季定型」も認めるまでが穏当だと考える。例えば、部活動を主題にした無季定型の俳句をWEBで検索¹⁾すると、次のような作品を見出せた。いま運動系と文科系に分けて一句ずつ挙げておく。

「一年目 球は打てない 拾うだけ」(テニス部)(入部一年目は球を打たせてもらえず球拾いだけだ) 現実の練習風景から窺える先輩と後輩の上下関係における慣例「この音を もっとと優美に 出せたなら」(吹奏楽部)(今出しているこの音があつ

ときれいにもっと優美に出せるようになったらいいのにな」演奏技術向上への願望

季語や切れ字なしでも体験に基づく中学生らしい視点や素直な表現が好ましい。

伝統的な有季定型の方も見ておこう。長野県信濃町一茶記念館が主催⁽²⁾する第20回小林一茶全国小中学生俳句大会の中学生の部から入選の二句。小林一茶大賞「あお向きの僕を見下ろす」**「扇風機」**「夏」ぐったりと気だるく暑い、ある夏の一日

信濃町長賞「祖父の声聞く日は来ずに揺れる菊」**「秋」**菊の花から亡き祖父を偲ぶ

擬人化された扇風機の滑稽さや傷心の孫の心情を反映した風に揺れる菊の描写は、観察力・感受性・表現力に優れ、音声から映像的場面が脳裡に再現されるようだ。

三 高校生の俳句作品と選考

句作を促す動機として、コンクールに応募して入選するという目標も悪くないだろう。ここでは、「第22回神奈川大学全国高校生俳句大賞」(募集要項【テーマ】あなたの感性で自由に綴ってください。部活・友情・スポーツ・勉強・受験・恋愛・家族……そして、自然・平和・政治・生命・宇宙【応募条件】応募作品は、本人が創作した未発表の作品に限ります。三句で一作品です。三句に満たないものは無効となります。の最優秀賞受賞作品のうち、部活での出来事を詠んだ三句一作品を紹介⁽³⁾しながら、高校生らしい独自の体験的な俳句表現とは何かについて考察してみたい。

糸内大知 三重県・四日市南高等学校1年

〔受賞後の本人のコメント〕

「採れたての胡瓜の如き返事して」

受賞句は夏休み、ソフトテニス部の合宿での

「ああ言えばよかったのかも髪洗う」

出来事を詠みました。俳句に表すことで自分を客観的に見れたところが面白かったです。

「友の肩湿布貼り替え夏の月」

選考座談会では「高校生らしい」として評価された。復本一郎委員は次のコメント。

一句目、「採れたての」の句は比喩俳句というか、如き俳句というか。これは俳人たちにはあまり好まれない、だけど拔群に面白い。「採れたての胡瓜の如き返事」って、こういう返事でしようか。これは非常にスカッとしたいい返事ですよ。ね。「採れたての胡瓜の如」くためらいのない返事です。二句目はその逆で、「ああ言えばよかったのかも……」と逡巡している感じ。三句目は、山小屋にでも行ったときの出来事を一句にしているのかもしれない。そうすると、三句全体

が部活動か何かでしようね。登山か、サマースポーツか。友の凝った肩に湿布をしていて、夏の月が山小屋から見るといった感じ。ですから、一句目、二句目が、高校生のたゆたい、心の揺らぎみたいなもの。三句目が現実みたいなもの。それぞれの確に三句に表現されているのではないでしょう。

選者は投句の背景について、三句で一作品を構成するストーリー展開から部活動ではないかと想像を巡らしているが、「ソフトテニス部」と具体的な部活までは特定できていなかった。しかし、部活での心情の変化を汲み取り、若者への温かい眼差しから、初々しさや爽やかさを肯定的に評価している。切れ字はないが、いずれも二句切れとなっており、題詠でなく体験に基づき自然に季語が用いられている。

比喩「採れたての胡瓜」は、噛むとポキッと音が出て歯応えもシャキシャキしており、食べる前からきゅうり独特の青臭い匂いが鼻を掠める新鮮さを表現している。先輩の指示を受ければ何の躊躇もなく従順にハイッと返事をする後輩の姿が目につく。

四 大学教養科目における俳句の言語活動

長らく教養科目の日本文学で「奥の細道」を講じてきたが、近年アクティブラーニングによって聴くだけでなく参加する授業が求められ、創作俳句を課すようになった。その際、有季無季を問わず、発句の一部を用いることを要件とした。ここでは、高校古典でも教材収録が多い「平泉の段」の名句「夏草や兵どもが夢の跡」の下五「夢の跡」(今となつては夢のようにあとかたも残っていないところ。また、往時はそこにいた人々がいろいろな夢を馳せたとあろう古いあと。すべての物語が結局はむなしということを表わす語。『精選版 日本国語大辞典』)を入れ、上五と中七は、二十歳前後の人生において夢の実現のため精一杯生きたと自覚した思い出を詠むようにと指導したところ、野球と受験の、印象深い次の二句を得た。当時の合戦は現代のスポーツや勉強に、武士は野球部員や受験生に相当し、鎮魂が共通するが、野球場と机上というマクロとミクロの視点の相違が面白い。甲子園は建造物だが地名に準じる。春と夏の大会があり、戦後の風物詩だが、季語としては特定できない。消しかずは事物だが、試行錯誤した学びの跡でもある。

「甲子園 猛し球児が 夢の跡」(句意)甲子園で勇猛果敢に戦っている球児もそれが終われば引退してしまうということ。※勝敗を超越して青春を燃焼し尽くした思い出の場所を述懐する心情が「無常迅速の理」で「時の移ろい」を象徴している。

「消しやすや 受験生らが 夢の跡」〔句意〕受験生の時、学校や図書館、試験会場でたくさんの消しやすが机や床に落ちていたのをみて受験生を感じた。※書いては消す軌道修正を繰り返しながら、ひたすら志望校合格をめざして勉強に勤しんだ青春の日々がスポーツで流す汗の如く消しゴムから出た消しやすに象徴されている。大学生となり、無我夢中で前を向いて進んでいた高校時代を振り返る気持ちの余裕もできたからこそ俳句と言えよう。

一方、近年のコロナ禍で大会が開催できなかった憂き目を前出の句「むざんやな甲の下のきりぎりす」〔秋〕に做った哀傷の句「むざんやな夢を追えない甲子園」も詠まれた。感染拡大で球児たちの直向きな日々の練習が報われないのは心が痛む。理不尽な不可抗力の前で為す術もなく終わった無念さが滲み出る。

長期化するコロナ禍は春夏秋冬の別なく老若男女に新しい生活様式を求めているが、もはやコロナは季節感のない通年季語の如くなり、個人だけでなく社会や経済の行く末まで憂えた「むざんやなコロナ蝕む飲食店」といった時事問題も詠まれた。

暗い話題ばかりだと憂鬱なので、「地元の有り難さを見つけよう」という課題で、羽黒山の連句会で詠まれた「ありがたや雪をかをらす南谷」に倣い、上五に感謝の詠嘆「ありがたや」を冠した句作では、季語と地名が入った「ありがたや寒鰯育つ富山湾」〔冬〕（立山連峰が控える外洋性内湾の富山湾では水深や黒潮などの影響のお陰により、肥えて身の引き締まった美味しい天然の寒鰯が捕れる）が詠まれた。

このように、創作に際しての俳句のきまりは、五・七・五の三句十七音の韻律だけを重視し、季語は題詠を避け、切れ字は普遍的な感情を間投助詞やを伴い形容した名句の一部を模倣する場合を除き、当時当所における対象の観察や心情の発露を妨げるものない限りで、純朴なかたちで用いることが大切であろうと考える。

五 日本文化と国際理解に資する俳句

国際俳句交流協会 (Haiku International Association) によってユネスコ無形文化遺産登録が推進されている俳句は、日本文化に興味のある外国人にとって国際交流の場だが、学術研究も盛んで、協会は言葉の壁を破り俳句の特徴である「詩的短さ」を損なうことなく翻訳することの難しさの一例としてWEBで「英語でわかる芭蕉の俳句」https://www.haiku-hia.com/about_haiku/basho300/archives/を公開している。これは「The Haiku of Basho」(Buddhist Society 令和元年7月)の著者

John Whiteが共著者で僧侶の佐藤平顕明と来日した折に芭蕉の俳句の英訳について議論する機会を得た成果だそうだが、俳句の原則五七五音を尊重して英訳を五七五音節 (syllable) の Haiku とし、芭蕉が字余りで詠んだ俳句はそれに従って音節を増やすという方針で三百句を英訳したとのことである。例えば、小学校三年の国語教科書にも収録されている前出の名句「閑さや 岩にしみ入 蟬の聲」(shizukasa ya iwa ni shimiru semi-no-koe)(23/300) は「the stillness, the voice of a cicada seeping into the crags」と英訳され、更に、(注)「奥の細道」の解説などを参考に、山寺の静寂の中で一匹の「ニイニイゼミ」が岩に浸み込むような声で鳴いている情景を詠んだものと解釈して翻訳しています。と補足している。認知科学者の角田忠信によれば、「ひとの左脳は知的、言語的な情報処理を担当するが、右脳は非言語活動を担当している。日本人では母音の音韻構造が特殊であることから感情音や自然音が左脳に偏り、これによって左脳が情動に関与するようになる。西欧人や他のアジア人では情動は右脳が主役を演じている。日本人では母音や自然音に含まれる僅かのFM音に対して鋭敏に左脳で応じるが、他の国民は子音の音形に対応した形にのみ左脳で応じる。日本の文化の特徴は脳の働きからも説明できる」⁽⁴⁾ そうだが、蟬の名句では、この脳科学的な説明も鑑賞の視野に入れ、句作者と翻訳者における生育環境と言語文化の相違を考慮する必要があるだろう。

翻訳家で詩人のピーター・J・マクミランは、In the great silence, permeating rocks — cicada chorus と英訳し、「深閑とした嚴重なる山寺に蟬が鳴く。その声は岩にしみ通っていくように消え、また静寂が広がってゆく」と現代語訳し、この句を訳すにあたり、初めは「silence」の中に蟬の声という音が描かれる矛盾に戸惑いを覚えた。しかし解釈を重ねるうちに、この矛盾こそが一句の重要なポイントだと気付いた。静寂の中に蟬の声だけが響くことで、その鳴き声がより強調されているのだ。「蟬の声」は日本語では美しいが、英語で「The voice of the cicadas」と書く違和感がある。そのため、ここでは意識になるが「cicada chorus」を採用した。アイルランドには蟬がいない。子供の頃に蟬の鳴き声を西部劇で初めて聞いた時、非常に神秘的に感じたことを思い出す。⁽⁵⁾ と解説している。

このように、俳句の英訳は英語を母語とする人々の間でも言語感覚によって微妙にニュアンスが違うが、その異質性を吟味すれば、文化の多様性を互いに認め合う国際理解に資する言語活動となろう。

六 生きる希望に繋がる俳句

異質な存在として学校教育では報われなくとも、自分の言葉を紡ぎ俳句の世界で認められ、生きる希望を持った少年・小林凜について紹介⁽⁶⁾し、句作の意味を問う。

少年は未熟児で生まれ、小学一年生から壮絶ないじめの標的となり、身の危険を感じた保護者は「学校へ行かせない」「張り切つて不登校」の選択をし、自宅での句作に生き甲斐を見出した。朝日新聞（平成23年9月12日夕刊こころ1面）「10歳のいま、刻む五七五 幼稚園から句作、昆虫・花・リズムに乗せ」の記事には、「俳句人口の年齢層は広がりを見せているが、朝日俳壇で入選を重ねる少年がいる。俳号は「小林凜^{りん}」。幼稚園の時、一茶の句と出合ったのがきっかけだった。みずみずしい感性を、五七五のリズムに軽やかに乗せ、10歳の現在を詠む。大阪府岸和田市の小学4年生、小林凜くん（本名・西村凜太郎）は、多いときで俳句を日に3句作る。出ない時は何日も出ない。……好きな俳人は小林一茶、松尾芭蕉、正岡子規。彼らの句をそらんじ、俳号も一茶からとった。俳句が生まれるのはたいてい外。大好きな昆虫や花、太陽を見ると一句できる。」と見え、「貝見れば海の思ひ出香り立つ」「抜け殻や声なき蟬の贈りもの」等の写生句があるが、自己の境涯を客観視した「生まれしを幸かと聞かれ春の宵」「いじめ受け春も暮れゆく涙かな」等の呻吟句もある。メタ認知を働かせた生きる糧や希望に繋がる句と言えよう。選者の長谷川耀は、「小さく生まれ大きく育て雲の峰」の句でエールを贈っている。身を以て人の痛みを知る少年が俳句という言語表現と出会って俳人の共感を呼び、開花した好例である。

七 人工知能が詠む俳句

俳句は、心を持ち情が動く人間が詠むという常識が覆る。それは、人工知能AIが何万と詠まれた俳句をビッグデータ化し、アルゴリズムによって解析し組み合わせることによって句作が可能となったからである。情報工学の川村秀憲は、どちらが芭蕉の句で、どちらがAIの句か見分け難い例「見送りのうしろや寂し秋の風」「病む人のうしろ姿や秋の風」を挙げ、「俳句生成を人工知能のタスク（課題）と捉えたとき、人工知能研究における多くの未解決の課題に向き合う必要があります。例えば俳句を詠むときには、どのようなことを伝えたいのか、それにあわせてどのような言葉を組み合わせるかを考える必要があります。テーマとなる季語を限定

し、適切に可能性を絞っていくプロセスが必要となります。さらには、人の心にとのように働きかけるかも理解する必要があるのです。研究は始まったばかりで、難題が数多くあります。それでも最初に紹介した例のように、芭蕉が詠んだものとすぐには区別することが難しい俳句を生成できるレベルになってきています。」⁽⁷⁾と報告している。機械による深層学習が人間の句作に接近、人間と対等に創作・鑑賞・選評にまで性能が向上すれば、人間に新たなメタ認知作用を促すのではないだろうか。やがてICT教育にAI俳句ソフトが提供される日が来るかも知れない。

今後の課題と展望

俳句は、定型をはみ出す言葉を省略し、耳目に触れる森羅万象への新鮮な感慨や人生で遭遇する様々な吉凶禍福の出来事を、上五・中七・下五の取り合わせによる化学反応と韻律に委ねて圧縮する高密度な文脈である。今後は、学校教育における国語系言語活動の枠組を超え、国際理解・臨床心理・情報工学へとリンクすることが課題であり、それによって、アナログとデジタルが融合した俳句の更なる可能性が広がってゆくとともに、言葉を操り、言葉に操られる人間存在の本質が明らかになると展望する。

注

- (1) いろんな俳句【部活の俳句集 全30選】中学生向け!! バスケやテニス・吹奏楽・卓球・バレーなど <https://haiku-textbook.com/haiku-club-junior-high-school/>
- (2) 第20回小林一茶全国小中学生俳句大会特設ページ 令和3年5月5日（一茶の誕生日）開催 <https://www.issakienkan.com/oshrase/>
- (3) 神奈川大学広報委員会編「17音の青春2020 五七五で綴る高校」(角川文化) 令和2年3月
- (4) 角田忠信「日本人の脳機能のユニークさと文化」(情報メディア文化学会) 令和2年3月
- (5) 32巻6号 昭和53年6月
- (6) ピーター・J・マクミラン「松尾芭蕉を旅する 英語で読む名句の世界」講談社 令和3年12月
- (7) 小林凜「ランドセル俳人の五・七・五 いじめられ行きたし行けぬ春の雨―10歳、不登校の少年。生きる希望は俳句を詠むこと。」(ブックマン社 平成25年4月)

川村秀憲 山下倫 央・横山想 郎共著『人工知能が俳句を詠む AI一茶の挑戦』(オーム社 令和3年5月)